

## 「新任のご挨拶」

関西学院大学総合政策学部 専任講師 戸部 智

今春、関西学院大学総合政策学部に着任いたしました。長い伝統と高い実績を誇る大学を支える一員として仕事ができることを大変嬉しく思います。与えられた環境に比べると、私の現状の能力や経験は分不相応なものであると自覚しています。1日でも早く関西学院大学の将来や学生の成長に貢献できる研究者になれるよう精一杯頑張ります。

私は学部から大学院まで経済学を専攻し、国際金融の分野に軸足を据えて研究を続けてきました。国際金融論の研究対象は多岐に渡ります。代表的なものとしては為替レートや金融・財政政策、金融危機が挙げられます。間口の広い分野の中で私の中心的な興味は国際資本移動と資産価格の2つにあります。国際資本移動については、金融グローバル化に伴って国境を跨ぐ資金の貸借が盛んに行われるようになりました。海外からの借入が金融市場の変動や銀行の行動を活発化させ、時には望ましくない結果を引き起こすという議論はしばしば聞かれます。大学院時代はそれを念頭に置いた実証分析を続けてきました。

また、もう一方の興味の対象である資産価格は基本的に各国/各企業のファンダメンタルズ、例えば経済成長率や収益率、に応じて決定されると考えられます。しかし、時にはファンダメンタルズの動向と乖離した価格変動(資産バブル)が発生したり、投資家が感じている楽観/悲観的な雰囲気が価格変動を生み出す支配的な要因として振る舞う場面が発生したりします。それらを踏まえて、世界各国の資産価格の変動を決定している要因は何なのかを、特に国際的な視点から、探る研究も続けてきました。

思い返せば、私が学部生の時にサブプライム問題やリーマン・ショックが発生しました。「100年に1度」とも言われた実体経済および金融市場の変動をリアルタイムで観察でき、それに関してゼミで学べたことが現在の研究テーマの選択に大きな影響を与えています。しかし、結果を求められる大学院での研究生生活の中で、当時抱いていた生き活きとした疑問や知的興奮、問題意識といった初心が摩耗していったことも事実です。経済学を学ぶ私に対して、両親は帰省の度に「人々の幸福に資する研究をなさい」と助言をくれていましたが、それもいつしか言われなくなりました。最近ではデータ分析作業をする私の姿を見て、「パソコンの中の経済と戦っている」と表現するほどです。

多様な経歴を持つ先生方や国際的な実務の現場で能力を生かしたいと望む学生が多く在籍する総合政策学部で職を得られたことは、現実の経済と自身の研究の繋がりが希薄になりつつあった私にとって姿勢を修正する良い機会であるとも感じています。今、ここに居られることがまたとない幸運であることを意識し、現実の経済と自身の研究をどのように橋渡ししていくかが大切になってくるのだろうと思いを新たにしています。それが実現できた時、多くの人々の幸福に資するより良い研究、より良い教育ができるようになるのかも知れません。改めまして今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。